

働き家計に協力した。

女手一つで四人の子供をかかえての奮闘、幾多の苦勞を乗り越え、皆それぞれお互いの立場を理解し合い助けあつて子育ての大役を終わり、長男夫婦と同居、孫たちにかこまれ幸せな毎日を通し、また、高齢者大学、大学院に通い、たくましく朗らかに生きる英子未亡人である。

(社)岐阜県引揚者団体連合会

理事長 川村 一正)

義勇軍中隊長として

生徒を引率

岐阜県 田 中 鈴 夫

私は大正四年十一月、岐阜県土岐郡泉町の自作農の長男として生まれた。父は私に望みを託して旧制中学校に進学させてくれた。しかし当時は農村恐慌の時代、不景気のため、ついに退学の余儀なきに至った。恩師

は私を惜しみその努力により、一年遅れて復学することができ、卒業した。当時は優秀な生徒の多くが、軍人関係の学校に進んだが、私は片耳の聞こえが遠いため断念、学資のいらぬ岐阜県師範学校に進んだ。

入学して間もなく、頼みにしていた父が死亡。親類その他の援助により卒業し、小学校教員となった。そんな環境に育ったせいにか、恵まれない子供に格別に目をかけて教育に当たってきた。

たまたま太平洋戦争の熾烈しだつな昭和十八年、私が小学校教員になって八年目、土岐郡土岐津国民学校教諭として六年生を担任していた。周囲の人々は友を含めて、どんどん召集をうけていった。受持ちの子供にも出征兵士の家庭が次第に増えていった。

そんな慌ただしい中、満蒙开拓青少年義勇軍の指導員の募集の話聞いた。独身の気軽さも手伝って、何とかしなければと考えていた矢先、どこから聞かれたのか、土岐地方事務所から教学指導員で行ってほしいとの話があったが、なかなか決心がつかなかった。

ところが昭和十八年の暮れ、土岐地方、事務所の兵

事厚生課長が来校され、県から「岐阜県中隊長に推薦するから是非行つて欲しい」と言つてきているとの連絡をうけた。弱冠二十九歳の身に思い掛けない大任。

当時の土岐津国民学校長も盛んにすすめられる。しばらく考慮の時間をもらい、年末から正月にかけて家族親類とも相談をした。兵隊になつた人々のことも考え、身に余る光栄でもあり、ついに決心して正月の御用始めに返事した。早速、昭和十九年一月八日に茨城県内原の満蒙開拓幹部訓練所に入所するよう県から通知をうけた。

かくして出征兵士なみに、土岐津駅頭に近隣の人や、土岐津国民学校生徒などに送られて出発して入所した。行つてみれば岐阜県から三人の幹部が入所して、訓練をうけておられた。幹部たちは県からの通知で髭を生やした学校長級の、堂々たる中隊長が入所すると思ひ込んでおられたのに、二十九歳の若僧だったので、「あんぐり」したとのことであつた。他県ではみな中隊長が来ているのに、岐阜県だけが決まらないのは恥ずかしいと、三人がやかましく請求したため、県は予定し

ていた青年学校長が駄目になつたので、窮余の一策として私を推薦したことがあとで分かつた。幹部訓練所の山口寮長も私を見て、中隊長を幹部の間違ひではないかと疑い、私を事務室に呼び、それとなしに確かめられた。かくして昭和十九年度の日本一若い義勇軍の中隊長が誕生したわけである。

入所以来二カ月有余、責任の重大性をひしひしと感じ、教科に、訓練に、農事に一生懸命はげみ、とくに岐阜中隊幹部三人との融和をはかることに努力した。

内原満蒙開拓幹部訓練所の訓練生は、将来開拓団、義勇軍の幹部及び現地各訓練所の職員になる予定者で、北は北海道から南は沖縄までの者が、一緒に寮生活をなしつつ訓練をうけた。その間地方訛りがとびかい、生活習慣の違いが同居し、誠に多様な生活ができ、大変よい経験をした。かくて教育をうけた幹部の我々は、全満州各地の青少年義勇軍や開拓団の幹部としてそれぞれ配属されたのであつた。

幹部教育を終わった私は、昭和十九年三月十五日、岐阜県よりの二百三十二人の訓練生を中隊長として幹

部三人とともに、内原訓練所に迎えたのである。

満州に渡る

訓練生は国民学校高等科を卒業したほとんどが十四歳で、それぞれ恩師や同級生、郷党の人々に軍人なみに送られ故郷を出発、岐阜市に集結、昭和十九年三月十四日岐阜市伊奈波神社で結団式を行い、岐阜第四十四中隊を編成、県庁前で岐阜県知事の激励をうけて、岐阜市中を行進し内原訓練所に入所してきた。

三月十六日入所式、加藤完治所長の訓示と閲兵分列をうけた。そして約二カ月の内地訓練を終わり、五月七日内原出発。名古屋駅頭で家族と面会、玄界灘をわたり、五月十七日ハルビン訓練所に入所した。これより現地訓練が始まり、みんなよくやり模範中隊となった。訓練所が北満の中心地ハルビンにあったので、開拓関係の高官の視察を次々にうけ、名声をはせた。昭和二十年度の義勇軍の幹部訓練を二回にわたってすべて我が中隊で行われ、いささかなりとも恩返しができた。

昭和二十年三月、私は現地報告のため内地に帰国、

一カ月にわたり県の計画により、岐阜県各地で訓練生の親に対し現地報告会を開き、現地との交流を深めた。五月十六日に責任を果たし、妻をつれて一カ月半ぶりに故郷を出発。この時期にはアメリカの潜水艦の攻撃により下関より船は出ず、最後まで言われる船に夜半博多で乗った。夜通し船は走り、明るる朝無事釜山入港。そしてハルビン訓練所に帰所した。

時あたかも戦局熾烈^{しれつ}、軍の命令により義勇軍も、軍需工場に対し、戦時勤労挺身隊を派遣することになった。我が中隊は第一次を四月に五十人、続いて六月には百人の派遣の命が下り、中隊の主力が奉天市の満州車両株式会社に移ることになったので、中隊長の私も妻をハルビンに残し奉天に赴任した。

七月には千葉県中隊の百五十名も来て、各職場に分かれ、基礎訓練を始めた。

八月五日千葉中隊の訓練生が死亡したので、その遺骨を持ち、訓練所本部への状況報告及び留守中隊連絡のためハルビンに帰る。九日ソ連の宣戦布告があり、ソ連軍の爆撃をうけ、全満の交通機関がストップした。

十一日にやっと運行開始したので大急ぎ奉天に帰った。
十四日に明日重大放送があることを耳にし、一億玉
砕かと話し合った。

十五日には本部会議室に社長以下各課長まで集合、
ラジオで陛下の御肉声による停戦の御詔勅を聞き涙す
る。早速訓練生を集め、終戦を告げ今後の心構えを話
した。

終戦後の動き

翌日より満系社員の動きが不穏になり、慌ただしい
空気が漂い始めた。

当日以降については、当時の私の日記は次のように
記している。

〔昭二十・八・一七〕 会社に労務使役に来ていた
刑務所の囚人が五十人ほど脱走していった。

〔昭二十・八・一八〕 隣の満州工作機械会社に艇
身隊として派遣されて来ている横山中隊（岐阜県先輩
中隊）へ今後いかにすべきかの連絡に行き、我々義勇
軍の今後の身の処し方について話し合う。

夕方満系社員が多数会社に押しかけて来たが会社を

守る。軍隊が各所でソ連軍に引渡す軍事資材を集積し
ている。

夕方にはソ連兵が奉天市内から進駐して来た。戦車
を先頭に泥まみれ、油まみれの兵隊が乗っている。年
寄りもいれば、少年もいる。顔の白いもの、黄色の顔、
黒い顔、服装も色とりどり、ヨーロッパ戦争の激しさ
がわかる。こんなものに負けたのかと思うと全く悔し
かった。本当に戦争は紙一重だ。

〔一九〇二四〕、暴動起こる。会社では社宅から家
族全員引き揚げさせた日もある。我々は会社で作った
槍を木銃の先につけた木銃槍を全員持ち会社を守った。
なかなか凄惨の極み、犠牲者も出る。最もすごかった
のは二十三日で、八路軍及び暴民と日本人が東の原で
激撃戦キョウゲクセンを行う。しかし指導者が機をつかんで仲直りさ
せた。会社の中で部品造りをやっていた白系露人のマ
キシモク及びマレンコクがよく活躍してくれた。この
間、寮に帰らず、会社の中でごろ寝をし、明日にない
命を考えて、酒もよく飲んで元気をつけた。

この間に、隣の満鉄鉄道工場の社宅では、偽八路軍

が入り、男子全員を強制連行、そのすきに略奪に入った。残っていた婦女子は我が身を守るため、十数人が頭髮に入っていた青酸加里を飲み自殺した。これを火葬にする煙が終日上がり、風とともにその臭気がただよつてきた。こんなことで命を落としていたら、敗戦国民は命がいくつあつても足りない。

〔八・二五〕 俸給三カ月分が渡される。我々艇身隊には用なし。

〔九・二二〕 暴動が大体静まる。中隊長としての私は、ハルビンの残留中隊が心配のため訓練生二人をつれてハルビンに出掛ける。朝早く会社を出て、大体順調に奉天駅に着く。約四キロの道である。もちろんそれまでに頼んで二十人一組の切符を手に入れておいた。グループは軍人、その他さまざまなり。十二時出発。夜は鉄嶺で一泊する。午後二時新京に到着。満州開拓青年義勇隊訓練本部を探せしも不明。駅前の日本石油ビルの三階の居留民会の收容所を探しあてて入れてもらう。白城子方面から来た避難民と一緒になる。怪我をした人もおられ、辺地の暴動の大きさを知る。それ

よりハルビン行きと待つ。

当時ハルビンはソ連軍による強制使役の真つ最中のため、交通が途絶している。やっと訓練本部を探しあて、奉天方面の状況報告をなす。奉天方面の最初の報告であるといつて大へん喜ばれ、戦時勤労艇身隊は、決して現地を離れないよう連絡してくれと言われ、奉天方面の艇身隊派遣の書類をもらう。

〔九・七〕 新京随一の繁華街吉野町で、秋田中隊の勝田教士に会う。共に幹部訓練所で教育をうけた間柄、新京出張中に終戦となり中隊へ帰れないと言ふ。とうとうハルビン行を断念し、切符を買つて五日ぶりに奉天に逆戻り、夜十二時出発する。

〔九・八〕 夜九時ごろ奉天駅に到着す。暴民がブラットホームにいつぱい来ている。ソ連兵が金品の強奪に来る。実に凄惨だ。駅と交渉して明朝出発予定の安東行の列車に乗り込む。車中で灯火を消して、動かす話もせず、一夜を明かす。全く恐怖そのものの一夜であった。

〔九・九〕 朝七時ごろ、暴民がいなくなるのを待

って列車を出る。奉天駅前では三階建ての建物が燃えている。道路の真ん中には人が殺されている。二人裸で雨に濡れて死んでいる。その中を気持ち悪く通って行く。ついに鉄西のガード付近まで来て、ぞろぞろ歩いてきた暴民に追われる。三人は散り散りで逃げる。

私はガードの向こうには暴民がいると考え、鉄道線路に飛び上がり横切つて、日本軍から押収し積んであった兵器弾薬箱の影に隠れた。暴民は追つて来ない。ヤレヤレと思つていたら警備のソ連少年兵に捕まった。

後ろを向けと言う。後ろを向いたら自動小銃をガチャガチャやる。手を上げて後ろをそおつと振り向く。身体検査をうける。新京でもらつてきた奉天の艇身隊の工場配置図が怪しいとみたか取り上げられた。そしてあっちへ行けとあごをしゃくつて解放された。それにしてもよく撃たなかつたと思う。ガードの向かい側にソ連兵が警備していたので、撃てばそちらへ弾丸がとんでいくので、撃たなかつたのだろうか。その少年兵の顔がいつまでたつても消えなかつた（今でも覚えてる）。その後、幾度かそこを通つたが、いつも手を

合わせて感謝した。

間もなく隠れていた訓練生と一緒に、満州工作機械の横山中隊に訓練本部の命令を伝達、続いて住友金属の艇身隊へも伝えて満州車両にたどりつく。後で聞けば六、七、八の三日間は再び奉天の情勢が悪化したとのことであつた。

〔九・一五〕 裏の日本軍隊の被服廠から、ソ連軍が本国へ運ぶ作業に訓練生が行きたいと言う。千葉中隊の内藤教士が引率する。一緒に行つた食堂の高木氏がソ連兵に撃ち殺される。そのため翌朝早く帰る予定が遅れて十一時ごろ帰ってくる。心配する。

〔九・一七〕 また五十人ほど使役に行く。衣服や軍靴が欲しい。死んでもよいから使役にやってくれと言う。会社の井場氏に頼んで共に出掛けていつてもらった。夕方一緒に帰つて来た。やつと安心した。

〔九・一八〕 使役に行つた者が衣服、靴をどつきりもらつてくるので、今まで使役に行かない者が是非行きたいと頼みに来る。思いきつて残員全部をつれて使役に行く。ちようど部隊移動の関係で午前中に終わ

る。収獲がなかなか大で、みんなに分配した。

心配した使役もやつとこれで終わった。

〔九・二〇〕 大場、竹下、小池（共に九州出身）

の三氏が部隊解散により、東陵を出て命からがら逃げ
て来て助けてくれと言う。かくまつてやる。このころ
より会社がソ連軍管理下で仕事を始めたので、脱走兵
ということを隠して三人を全員社員に採用してもらう。

〔九・二五〕 会社にソ連兵が警備に来ている。白、

黄、黒と色とりどり、朝、点呼をやる。三十人ぐらい
だ。番号をかける。二十番ぐらいで止まつてしまふ。

やり直して番号をかける。また止まる。どうも二十以
上の数を知らない者がいるらしい。

〔九・三〇〕 会社警備のソ連兵は暇があれば略奪

に回っているらしい。腕にいつばい時計をはめている。
故郷への凱旋の土産にするのだろう。日曜日の朝、事
務所で居留民会の打合せをしていた。そこへ衛兵が入
つて来た。時計が動かないので直せと言う。時計屋で
ないので直せないと言っても言葉が通じない。怒り始
めた。やむを得ず受け取つて竜頭をまわす。動き始め

た「ハラシヨ」と言つてニコツとして帰つて行つた。

〔十一・三〕 明治節拝賀式を中隊宿舎でやる。負

けても日本人だ。持っていた小さな国旗を皆でこっそ
り掲げた。

〔十一・四〕 ハルビン訓練所にいた五人の訓練生

が中隊長をたよつて避難民と共に南下して、難民収容
所にいるのを見つけて連れてくる。ポロポロの服を着
替えさせてやる。寮へ連れて行き一緒に寝て、ハルビ
ン訓練所や留守中隊の話聞く。全くひどい状況のよ
うだ。

〔十一・七〕 ソ連革命記念日である。奉天駅前で

行われる革命記念日の式典に強制命令で出掛ける。馬
鹿げたことだと思つたがやむを得ない。式が終わつて
バザーが開かれていたので一杯飲み、うつぶんをはら
して帰ってくる。

〔十一・一〇〕 会社の杜宅に一杯飲屋ができた。

夜、同僚と共に飲みに行つた。そこへ会社に来ている
警備兵の下士官二人が飲みに来て隣に座つた。紙切れ
に何かを書いてよこした。よく見ると代数の方程式で

ある。数字、記号は万国共通のようだ。それを解けと言う。解いてやったらにっこりして「ハラシヨ」と言った。二十以上が数えられない兵士がいることから見れば、さすがは下士官だと思った。

〔十一・一五〕 月の冴えた夜だった。同僚と共に近所の社宅へ行き、寮に戻るべく、十時ごろ会社の正門の近くを通ったら、警備兵に見つかった。「止まれ」と言っているようで、空に向かって銃を撃った。止まっていると近づいて来て、じっと顔を見て「キタエスキ」(中国人)、「ヤポンスキー」(日本人)、「コウラバン」(朝鮮人)と言う。「ヤポンスキー」と言うと「ヤポンスキー、オーチンハラシヨ」(大変よろしい)、「キタエスキ、ハラシヨ」(よろしい)、「コウラバン、ニエツトハラシヨ」(いけない)と言って開放してくれた。戦争に負けても、ソ連兵にもやっど日本人の優秀な姿がわかってきたらしく嬉しかった。

〔十一・二五〕 全満州の列車はソ連があらゆる物資を本国に運ぶため、軍用列車を除いて止めているらしい。白系露人に頼んでおいたら、やっど一般列車が

出ることがわかったので、ハルビンに出掛ける。

昨夜は青葉町にある親類に泊まる。早朝奉天駅に行ったら、やっど午後九時に出ることがわかる。会社と一緒にいた片田氏と共に、ハルビンの第一列車に乗る。車中は中国人ばかり、列車の片隅に小さくなって座る。心配していたが明るく二十六日午後四時ごろ、ハルビン駅着、片田氏の満鉄宿舎に行き泊めてもらう。

〔十一・二七〕 午前十時出発してハルビン訓練所までの道を歩く。途中引っかかることもなく、無事午後二時ごろ到着す。懐かしい道だった。最初に訓練所本部を探しあてて、所長閣下(陸軍少将)に奉天の岐阜、千葉両中隊の艇身隊の状況を報告し、所長よりハルビンの終戦後の状況を聞く。所長は現在も着のみ着のままの由、そぞろ哀れさを増す。終わって職員や残留中隊の訓練生にも会う。間もなく案内されて宿舎に行き妻に会う。全く感無量なり。八カ月の腹をかかえて苦労してきた由、全く済まなかったと思う。夜は今のハルビンのみじめな生活の話を書く。

〔十一・二八〕 訓練所の各所を訪問す。訓練所は

北満からの収容所になっており、避難民でいっぱいである。五歳以下の子供はほとんど死亡したと言う。病院へ訓練生を見舞いに行く途中の畑は一面の墓であった。

〔十二・一〕 ハルビン訓練所出発。訓練生一人をつれて、妻と共に三人で総隊本部の前から馬車に乗り出発する。乗った車が違って大回りで太平橋方面に連れられて行く。途中で三人も四人も殺されていて雪の中に放置されており気味悪し。太平橋からロシア人基地を通り、ハルビン駅到着。井田氏宅に泊めてもらう。

〔十二・三〕 ハルビン駅を夕方出発する。会社の証明書を持って行き、乗車券を手に入れることができた。乗車するとき、荷物を略奪されかかる。「シヨートル」と連呼してやつと事なきを得た。日本人車掌に小荷物車に乗せてもらう。ソ連兵が次々と車内を金銭強奪に回って歩く。日本人小荷物取扱手に頼んで、妻を車掌室の上棚にかくまってもらう。全く地獄で仏に会ったような気持ちだった。夜、徳恵の手前で停まっ

いた貨物列車に追突して脱線する。貨物列車の最後尾の貨車には朝、ハルビンを出発した六十人ぐらいの日本人避難民が乗っていて、中でストーブを焚いていたので、貨車もろともに脱線して燃え、焼失してしまつた。死体の燃える臭気が粉々として漂い、何とも言えなかつた。黙とうする。一昼夜とうとう停車する。

実はハルビンを出発するとき、最初はこの避難民列車で南下しようと考え、居留民会へ行って打ち合わせた。しかし治安が大分よくなった話を聞き変更し、一般列車に乗った。最初の予定通りであつたら、あるいはあの貨車の中にいたかもしれないと考え、ぞーっとした。

〔十二・五〕 奉天着、三人で馬車に乗り、満州車の両の社宅に帰る。これでやつと重荷が下りる。

嚴寒と疫病

ソ連は戦争による各種物資の不足を補うため、満州からあらゆる物資の輸送を考え、各種機関の総力をあげてどんどん運んだ。列車の不足もその例に漏れず、古い機関車、貨車の修理をなして運んでいった。

満州車両もソ連軍管理下に入ってから、残業徹夜が続く正月休みもない状況だった。訓練生も徹夜残業の連続で酷使された。それがため寒さに伴い病人が出始めた。

訓練生は終戦後風呂に入っていない。施設も水もない。食糧、衣服十分ならず、着たまま、ごろ寝の生活を続けてきた。そのため皮膚病にかかった。使役でもらってきた硫黄をつけた。たむしはてき面に治ったが、それがため腎臓を悪くして死亡する者が出てきた。

栄養失調者も多くなり、寢床で死亡し、朝冷たくなっている者も出始めた。

労働過重でたまらなくなり、他所へ働きに行つた者が、正月を迎え職を失い、寮へ帰つて来たが、寝る場所がないため機関車の炭水車の中に入り、コークスで暖房をとつたため炭酸ガス中毒死するなど事故死者も出た。

しらみの媒介による発疹チフスにかかると高熱が続く。隔離する場所とてなく、そのまま死ぬ者、治つても体力が衰え放心状態、そういう人を我が家につれて

来て療養させ、体力がついたら寮へ戻してやるなどを繰り返した。

こんな生活をしているうちに千葉中隊の内藤教士が一月下旬、発疹チフスに感染されて死亡された。ほかの幹部は召集のためおらず、それがため岐阜中隊百五十人、千葉中隊百五十人、計三百人を私一人で帰国まで面倒をみることになった。

敗戦により訓練生に対し、国家的援助は一切消えた。私の職務も終戦とともに一切終わったことになる。しかし故郷の訓練生の両親を思うとき、道義的にはそんなことは言っておられなくて悩んだ。しかし私には何もしてやれない。

十五歳の義勇軍訓練生は自分の力で生きていかねばならない。

そのためかソ連警備兵の宿舎に衣服を盗みに入り捕らえられた。怒つたソ連兵は銃殺すると言う。それを謝罪に行きやつと釈放してもらつた。こんなことが再三再四あつた。

寂しいけれど、土が凍ってしまうので、寒くならな

いうちに、死亡者埋葬のための穴を掘った。そしてそこに何人かの死亡者を棺に入れて埋めた。二十一年四月に入り、大分治安もおさまり暖かくなってきた。冷凍になった死体を溶けないうちに掘り、遺骨にして内地の親もとに届けたいと考え、訓練生を督励して掘り返し、会社から石炭をもらい火葬場に行き火葬にし遺骨を持ち帰ることができた。

こんな生活をしているとき、長男が難産の末生まれだが半月で死亡。その悲しみの最中、会社より訓練生がまたソ連兵の宿舎に食料泥棒に入り捕らえられ、警察に連行されたとの連絡をうけ、すぐ駆けつけ謝罪文を書き、もらい下げてきたことも忘れない一事である。

このような生活の中、三月二十八日満州車両会社は、ソ連軍より中国に返還され、間もなく訓練生は全員解雇されてしまった。生きるためには遊んでおられない。働きに行った先を私に連絡するよう約束して働きに出し、帰国の日の一日も早からんことを祈った。

引揚げ

五月に入り、我々が待ちに待った引揚げの話聞く

ようになり、遂次具体化してきた。

〔昭二一・五・二五〕 引揚港コロ島で、引揚者の宿舎の世話や荷物の積み込みなどの使役に服するため、力行隊という奉仕団体が募集され、訓練生や会社の青年工員によって組織された。本日、当地区の第一陣として帰国の途につく。できるだけ早く、一人でも多く内地の親もとに帰り、同僚の無事を親に知らせてくれるよう手配する。まず一安心なり。

〔六・二〕 内地引揚げの日が近づく。大隊本部で引揚者の名簿の作成にかかる。手もとにいる訓練生を各所の満人のところへ走らせて、訓練生に連絡をとり名簿にのせる。

〔六・一〇〕 引揚げの日が決まってきたので、岐阜、千葉両中隊の訓練生に会社に戻るように連絡する。次々と集まってくる。

〔六・一五〕 待望の奉天出発の日である。午後二時、一緒に働いた満州車両の満人工員の見送りをうけて、社宅から大車に乗って出発する。瀋陽第七十三大隊の所屬である。その夜は北奉天の収容所にて宿舎す

る。十六日に出発する予定であったが、船の関係でも一日余分に滞在する。

〔六・一七〕 午後五時、北奉天駅出発、夜通し引揚列車は軽快に走る。

〔六・一八〕 午前四時、錦州駅に到着する。十二時にやっと宿舎に入る。待望の帰国を前にして千円しか持つて帰れないことがはっきりした。余分の有り金を全部使ってしまった、楽しい日をすごす。

〔六・二五〕 錦州出発、コロ島に向かう。錦州に一週間、帰国を前にして、すべてのいやな思い出と労苦を洗い流す。夜はコロ島の高台の收容所に入り、満州における最後の夜をすごす。

〔六・二六〕 朝コロ島收容所を出発。いよいよ埠頭に向かう。新京から視察に来ていた引揚調査団と無蓋車に同乗す。さかんに羨ましがっていた。検査と消毒を終えて、あこがれの乗船をなす。『日昌丸』だ。乗船を終えると直ぐ出帆す。遠ざかり行く大陸をデッキで眺め、「二年有余苦しかった思い出の満州よ、さようなら」と別れを告げる。

〔六・二八〕 船上にて引揚げ船内での死亡者の水葬があり、船の後尾より海中に葬られていった。全員デッキに出て会葬し、黙とうをささげる。

〔六・二九〕 一路船は南下する。鹿兒島への入港を知らされる。昼ころより開聞岳の薩摩富士が見える。懐かしい故国の島山に皆手を合わせておがむ。涙がこぼれる。やっと故国へ帰って来たのだ。夕刻鹿兒島港に入港す。

〔七・四〕 七月二日の上陸が二日延びて今日になる。鹿兒島港停泊の一週間は全く長かった。やっと上陸できて故国の土を踏む。天保山宿舎に入る。

〔七・五〕 瀋陽第七十三大隊を解散する。近畿以西の者は帰って行った。故郷へ帰る被服の支給をうける。

〔七・六〕 中部以東の我々が、いよいよ出発というとき、同じ宿舎にいた瀋陽第七十六大隊から猖狂熱が発生し、出発延期となる。

〔七・八〕 天保山宿舎より鴨池宿舎に移され、隔離八日間と決定する。

〔七・一六〕 やつと帰郷というとき、鹿児島本線が大洪水のため、鉄橋流失で不通、日豊線回りで、十二時二十一分出発。音楽隊が駅頭で送ってくれる。

〔七・一七〕 小倉駅プラットホームで水を飲みに下りる。女優飯田蝶子さんに会う。真っ黒な顔を見てかにつこりしてくれる。

〔七・一八〕 岐阜駅で訓練生多数下車、手を振って別れる。名古屋駅で下車。千葉中隊の訓練生に名簿、その他の書類を渡し、県庁に届けるよう依頼。責任を果たし別れを告げる。中央線乗車。午前九時四十分、懐かしの郷土土岐津駅着。リュックサックを背負い、我が子の遺骨を抱き、妻と共に我が家に帰る。突然の帰国に母は茫然としていた。

帰国後我々は、第七次満蒙开拓青少年義勇軍の名にちなみ、ハルビン七義会を作り、お互いに励ましあい、親睦を密にし、亡き拓友の慰霊をも行い今日に至っている。その間、昭和四十三年には隊員の努力により費用を捻出して、岐阜県の中心地岐阜公園に岐阜県知事平野三郎氏の筆により、拓魂碑を建立し義勇軍全員の

名をとどめた。また、思い出の写真集も作成、我々の歩みをまとめた。昭和四十九年四月には思い掛けなく、引揚げに尽力したかどにより、外務大臣より全国引揚者表彰をうけ、ひたすら感激した次第である。

私自身は、満州にわたる前の教員に戻り、小中学校教育にたずさわり、地元中学校長を最後に五十一年三月退職、四十年の教員生活に別れをつけ、その後ささやかに百姓をしながら、幾多の公職をつとめて今日に至っている。

【執筆者の横顔】

田中氏は岐阜県の農家の長男として大正四年生まれの八十歳である。幼にして学術優秀だった田中氏は旧制中学に進んだが、当時の農村恐慌から中退のやむなきに至ったが、恩師らが田中氏の知能を惜しみ復学させて卒業。そんなさ中に父親の死没にあい親せきの方々の援助で師範学校を卒業して教員となった。

こうした環境にあつて成長した田中氏は生涯を通じて恵まれない人に対する理解と指導する情熱は学校教

員の立場から更に社会教育へ大きく役立つところとなつた。

小学校教員となつて八年を経た昭和十八年岐阜県から若冠二十九歳の田中氏は満蒙開拓青少年義勇軍の幹部職員たる中隊長に任命をうけて二百三十二人の訓練生を指揮統率して訓育に当たつた。

もとより岐阜県知事から激励をうけ、加藤完治所長の訓示を骨身に徹してそのまま実践された田中氏は、終戦後の混乱にあつても、更にソ連の暴虐無類の不法行為の真つ只中にあつて終始捨身の信念を貫き、引揚者の面目をほどこした戦乱の記述を刻明に書き証してあることは全く貴重なものである。

日本敗戦、満州国瓦解ががにあつて敗戦によつて既に個人個人が自由奔放となり、一人生き延びようとする中であつて、中隊長であつたという責任観念で隊員を無事引き揚げさせたことは言語につきせぬ功勞である。

運よく引き揚げてこられて岐阜県の教員に復職し小学校、中学校の校長に、次いで土岐市の教育次長の重責に就任して、退職後は推されて市農業要員に選任さ

れ、市の家庭相談員に委嘱された。もろもろの功勞が、県知事や外務大臣の表彰を受章。現在、県海外引揚者会常任理事として活躍されており、敬意を表してやまない。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

ああ痛恨の第九次徳命開拓団

岐阜県 所 みゆき

はじめに

苦難統きの在満四年六カ月の生活も空しく挫折し、ふるさとの安八郡輪之内町へ引き揚げ、ホツとする間もなく、養老山麓の西小倉の原野に再び開墾の鋤をふるう厳しい生活を始めなければならなくなった。

同志は、团长森田文吉さんを中心として、北安省徳命開拓団の仲間十二世帯と、龍江省と三江省の開拓団からの二世帯、その他の三世帯の計十七世帯が、原野